

# 全学共通教育における学部別履修状況の分析 —学問基礎科目・主題Bを中心に

寺 尾 徹 (調査研究部委員・教育学部教授)

中 谷 博 幸 (調査研究部委員・教育学部教授)

## 1. はじめに—「学問基礎科目」の課題

香川大学全学共通教育では、2010年（平成22年）に香川大学版の「21世紀型市民」育成のために共通教育スタンダードが制定され、2012年（平成24年）から完全実施されることになった。本稿の課題は、「学問基礎科目」や「主題科目B」（以下主題B）がその共通教育スタンダードを達成するものとなっているかを検証することにある。

香川大学共通教育スタンダードは次の五点である（香川大学大学教育開発センター 2013）。

- ① 21世紀社会の諸課題に対する探求能力
- ② 課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）
- ③ 広範な人文・社会・自然に関する知識
- ④ 地域に関する関心と理解力
- ⑤ 市民としての責任感と倫理観

このうち、「学問基礎科目」に関わるスタンダードは③であり、その到達基準は「人類の文化、社会および自然についての幅広い知識とともに、学部専門課程を進んでいく上で必要な学問的基礎を身につける」と定められている。従って、現行の「学問基礎科目」がこの到達基準に則したものかどうかが問われることとなる。この到達基準は二つに分けられる。

- 1) 人文・社会・自然に関する幅広い知識を身につける
  - 2) 学部専門課程を進む上で必要な学問的知識を身につける
- 2) については、さらに次の二点に分けて考える必要がある。

2-1) ここで言う「学問的知識」とは、学生が学部で学ぶ専門科目の基礎を直接指すのではなく、専門科目と関連のある他の学問領域の知識を指している。前者は各学部の専門基礎科目の課題である。「学問基礎科目」は、その分野を専攻しない学生を主な対象にして、それぞれのディシプリンに固有の学問対象と方法論を理解させ、「その学問領域の意義や面白さを伝えることを主眼」としている（『全学共通科目教員ハンドブック』2013年度版、7頁）。現代社会においては、専攻する専門分野の学問的知識の習得だけでは不十分で、複数の学問領域の方法論や知識に関する基礎をもつことが求められている。単なる幅広い知識ではなく、ディシプリンの基礎としての幅広い知識が、学部専門課程を進む上で必要な学問的知識である。

2-2) 自然科学系のいくつかの学問基礎科目の場合、今後学部での専門教育を受けるのに必要な基礎知識を習得する役割、および場合によってはリメディアル教育（補習教育）的な役割を担う。これは、高校までの教育との関連から生じたもので、専門学部の専門基礎科目との関わりも問われるこ

とになる。

以上のことから、「学問基礎科目」が上記の1)と2)を満たしているかどうか問題となるであろう。その場合、個々の授業科目において上記の点が考慮されて講義がなされているかどうかという問題と全学共通科目が制度としてそれに対応したものとなっているかという問題とに分けて考える必要があろう。本稿の直接の課題は後者にある。このため、本稿では、学生が実際にどのように複数の「学問基礎科目」を受講しているかを分析することにした。共通教育スタンダードの到達基準で言えば、できるだけ、幅広く「学問基礎科目」を受講していること、しかも人文科学、社会科学、自然科学に広く及んでいることが望ましい。その実態はどのようなものか、文系学生と理系学生とでは異なった傾向や課題があるのかどうか、またそこからどのような課題が導き出されるかが本稿の中心となる。以下の分析において学部ごとに履修パターンが異なるかどうかといったことも扱われるであろう。この学生の履修パターンに大きな影響を与えるのが卒業要件である。卒業要件は1)と2)を保証するものでなければならない。ところで、今回分析の対象とした各学部の卒業に必要な「学問基礎科目」の単位数の扱いは表1の通りである(香川大学 2012)。

表1 各学部における卒業に必要な学問基礎科目の単位数(2012年度入学生)

教育学部	4単位以上	×教育学
法学部	6単位以上	○哲学・論理学・倫理学・心理学・社会学・歴史学・経済学・経営学・ 地理学・統計学 ×法学・政治学
経済学部	6単位以上	×経済学・経営学・統計学
医学部医学科	14単位以上	◎数学E・物理学E・化学C・生物学C ×医学
医学部看護学科	8単位以上	
工学部	8単位以上	○数学・地学・物理学・化学・生物学 ×情報科学
農学部	4単位以上	◎化学・生物学

注) ◎ = 必修科目 ○ = 選択科目(学部指定の科目) × = 卒業要件として認めない

『全学共通科目教員ハンドブック』2012年度版、7頁

本稿の分析は、各学部が卒業に必要として定めている「学問基礎科目」をめぐる単位数が適切かどうかの一つの判断材料も提供できるのではないと思われる。

あわせて、主題Bとの関連についても考えてみたい。主題Bは、主に共通教育スタンダードの「①21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に関わるが、③とも密接な関連があるからである。

以下、検討に用いたデータの記述、学問基礎科目と主題Bの学部別履修者数と履修基準との関係、学問基礎科目の学部別履修状況、専門基礎的な科目を除いた学問基礎科目の学部別履修状況、人文社会科学系科目と自然科学系科目の学部別履修状況の特徴、主題Bの学部別履修者数の検討、の順で論じていきたい。

## 2. 検討に用いたデータ

2011年度全学共通教育カリキュラム改革以降の全学共通教育の科目のうち、「学問基礎科目」と「主

題B」について改めて整理する。

学問基礎科目は、2011年度カリキュラム改革前後で大きな変化はなく、大まかに3つのグループに分けられる以下24の「授業科目」から構成されている。

- (1) 哲学・論理学・倫理学・芸術・心理学・社会学・教育学・歴史学・文学
- (2) 言語学・法学・政治学・経済学・経営学
- (3) 数学・地学・物理学・化学・生物学・地理学・統計学・情報科学・医学・看護学

上記の24の「授業科目」それぞれについて、大文字のアルファベットを付して区別された複数の「科目」が開講されている。いずれも1科目2単位である。本稿では、開講科目のうち(1)、(2)に属する科目を「人文社会科学系科目」、(3)に属する科目を「自然科学系科目」と総称することにする。

学生は、学問基礎科目の中から、学部ごとに異なる履修基準(表1)に従って選択して履修することになる。なお、全学共通の制限として、実験・演習科目を除き、各授業科目について卒業単位に認定できる科目数は最大2つまでである。この点についても、学部や学科によって差異がある(例えば医学部看護学科は、一つの授業科目の中から複数の科目を履修することができない)。

学問基礎科目の中には、学部の専門分野と近いために履修できない授業科目が定められているケースや、逆に学部専門の学習に必要な科目として履修が求められているケース(本稿では「専門基礎科目」と総称する)がある。特に工学部・農学部・医学部等において専門基礎科目は大きな比重を占めており(後述)、今回着目する学問基礎科目の趣旨とは異なる履修傾向を含むので、適切に区別して考察する必要がある。

一方、香川大学全学共通教育における主題B「現代社会の諸課題」は、以下の7つの科目群から構成される。

- (1) 主題B-1 「歴史のなかの21世紀」
- (2) 主題B-2 「グローバル社会と異文化理解」
- (3) 主題B-3 「情報とコミュニケーション」
- (4) 主題B-4 「文化と科学・技術」
- (5) 主題B-5 「生命と環境」
- (6) 主題B-6 「人間と健康」
- (7) 主題B-7 「地域と生活」

学生は、学部ごとに異なる履修基準(表1、2参照)に従って、これらの科目の中から選択して履修することとなる。こちらもすべて1科目2単位である。7つの科目群についてどのような組み合わせで履修科目を選択しても構わない。

今回の検討に用いたデータは、全学部の2011年度と2012年度入学生の香川大学全学共通教育の学問基礎科目および主題Bに関する履修登録データである。2010年に制定された香川大学「共通教育スタンダード」に基づき、2011年度入学生より学問基礎科目と主題Bの履修基準がほぼ現在の形態に変化した。そのため、2011年度以降入学生の履修パターンの解析は重要である。

2013年度後期履修登録の締め切りをもって、2012年度入学生の2年間の登録パターンがほぼ確定した。ほとんどの学生は2年次までに全学共通教育の履修を終えた。2011年度の改革を反映した学生の在学中の全学共通教育履修登録パターンを、ほぼ2年分の学生(2011、2012年度入学生)について調査したことになる。

データは、学部・学科・課程別に分析できるものである。本稿では、経済学部・法学部・教育学部を「文系学部」、農学部・医学部・工学部を「理系学部」と、それぞれ便宜的に総称して呼ぶことにする。今回は「成績区分」が履修中あるいは合格となっている科目登録データのみを参照し、単位を取得しなかった登録は省いた。すなわち、本稿における「履修単位数」、すなわち「履修登録数」×2とは、2013年度前期までの合格単位数+2013年度後期の登録単位数を意味する。その結果、検討の対象となった科目の履修登録数は合計21,764となった。2011年度入学生と2012年度入学生については、ほぼ2013年度前期までで全学共通教育の履修を終えている。そのため2年生の後期にはほとんど全学共通教育授業の履修は終わっており、2013年度後期登録済みの履修登録数は606と少ない。そのうち学問基礎科目と主題Bの履修登録数はそれぞれ11,541, 10,223となる。今回の調査対象学生は、少なくとも1科目以上の「履修登録」のある学生で、全学で2494名である。今回は履修パターンを解析対象にしていることもあり、履修登録のない学生は省いた。

### 3. 学部ごとの履修基準と学問基礎科目・主題B履修状況

#### 3-1. 学問基礎科目と主題Bを合わせた履修状況

まず、学問基礎科目と主題Bを合わせた一人あたりの「履修単位数」を確認する。全学平均では、学問基礎科目が9.26単位、主題Bが8.20単位で、合わせて17.45単位である。

表2に、学問基礎科目と主題Bの卒業要件単位数を学部別に示した。表2における「区分指定」(A)とは、学問基礎科目(G)と主題B(B)の区分からそれぞれ履修すべき卒業要件単位数である( $A = G + B$ )。一方「区分自由」(F)とは、学問基礎科目と主題Bを含む複数の区分から自由に選んで取得すべき卒業要件単位数である。区分自由卒業要件単位数は必ずしも学問基礎科目と主題Bから選択しなければならないとは限らない。学部によっては、「健康・スポーツ科目」・「高学年向け教養科目」・「初修外国語」等からの科目の履修の可能性も与えられている。しかしながら、実際には、学問基礎科目あるいは主題Bの区分の履修によって卒業要件単位数を充当する人が多いものと思われる。

したがって、学生はまず、「区分指定」欄の単位数(A)を最低限クリアしていなければ卒業必要単位を揃えることはできない。なおかつ、多くの学生は、「区分指定+区分自由」単位数( $A + F$ )と同程度あるいはそれ以上を、学問基礎科目あるいは主題Bから履修している必要がある。

表2 各学部の履修基準。学問基礎科目あるいは主題Bの区分で取得することが指定されている区分指定単位と、学問基礎科目と主題Bを含む複数の区分から自由に選んで取得する区分自由単位に分けて表記している。

	卒業要件単位数(2012年度)					
	区分指定			区分自由 (F)	A+F	G+aF (a=0.5)
	学問基礎 (G)	主題B (B)	A (=G+B)			
農学部	4	6	10	10	20	15
経済学部	6	6	12	2	14	13
法学部	6	6	12	6	18	15
教育学部	4	6	10	8	18	14
医学部	14	6	20	0	20	20
医学科						
看護学科	8	6	14	0	14	14
工学部	8	6	14	6	20	17

表3 各学部の学生が実際に履修している一人当たりの平均単位数。学問基礎科目と主題Bに分けて記載している。なお、専門基礎科目(第5節)に分類した科目を除いた履修単位数を「専門基礎科目除く」の欄に示した。なお、専門基礎科目の平均単位数( $d$ )は、専門基礎科目を除く学問基礎科目の履修単位数( $g'$ )から、専門基礎科目を含む学問基礎科目の履修単位数( $g$ )を減じることによって得る。

	対象とした 学生数	一人当たり履修単位数						
		専門基礎科目含む			うち専門 基礎科目 ( $d=g-g'$ )	専門基礎科目除く		
		学問基礎 ( $g$ )	主題B ( $b$ )	計 ( $g+b$ )		学問基礎 ( $g'$ )	主題B ( $b$ )	計 ( $g'+b$ )
農学部	314	9.31	9.19	18.50	5.27	4.04	9.19	13.23
経済学部	578	7.55	7.03	14.59	0.21	7.35	7.03	14.38
法学部	317	8.50	9.08	17.58	0.02	8.48	9.08	17.56
教育学部	416	8.00	10.48	18.49	1.72	6.29	10.48	16.77
医学部 医学科	214	14.26	6.01	20.27	10.12	4.14	6.01	10.15
看護学科	128	9.08	6.23	15.31	1.66	7.42	6.23	13.66
工学部	527	10.54	7.92	18.46	7.70	2.84	7.92	10.76

この観点から、各学部の学生が実際に履修した学問基礎科目( $g$ )と主題B( $b$ )の履修単位数を示し(表3)、「区分指定」単位数( $A$ )、「区分自由」単位数( $F$ ) (表2)の関係をより詳細に見る。表3に見られる各学部の実際の学生一人あたりの学問基礎科目と主題Bを合わせた履修単位数( $g+b$ )は、「区分指定」単位数( $A$ )よりも「区分指定+区分自由」単位数( $A+F$ )に強く規定されており、 $g+b$ と $A$ 、 $A+F$ との相関係数はそれぞれ、0.36, 0.94である(図1a)。学問基礎科目と主題Bの履修単位数は、農学部、工学部、医学部医学科の理系学部において相対的に多い。これは、これらの理系学部において、表2の「区分指定+区分自由」単位数が20となっており、他の文系学部より多いことに起因している。

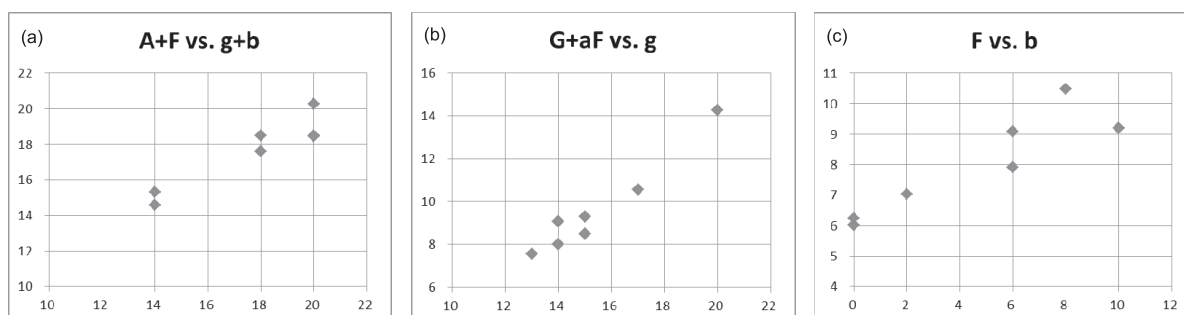


図1 各学部(医学部の場合学科)の履修基準単位数と履修単位数の関係を表す散布図。(a) 区分指定の履修基準単位数と区分自由の履修基準単位数の和(横軸)に対する、学問基礎科目と主題Bの履修単位数の和の関係。(b) 区分自由の履修基準単位数に対する、主題Bの履修単位数の関係。(c) 学問基礎科目の履修基準単位数と、区分自由履修基準単位数に係数 $a = 0.5$ を乗じた値の和に対する、学問基礎科目の履修単位数の関係。

こういった状況を端的に示すグラフが図2である。棒グラフで示した実際の履修単位数を、「区分指定+区分自由」単位数( $A+F$ )が強く規定していることがわかる。履修基準表から直接読み取れる単位数である区分指定単位数( $A$ )は、学生の学問基礎科目と主題Bの履修単位数にはあまり関係しない。各学部の学問基礎科目と主題Bの履修単位数はむしろ、表から計算してわかる「区分指定+区分自由」単位数に着目をして検討する必要があることに注意する必要がある。例えば、履修基準表で農学部や教育学部の学問基礎科目と主題Bの必修単位数が少ないからといって、これらの学部で学

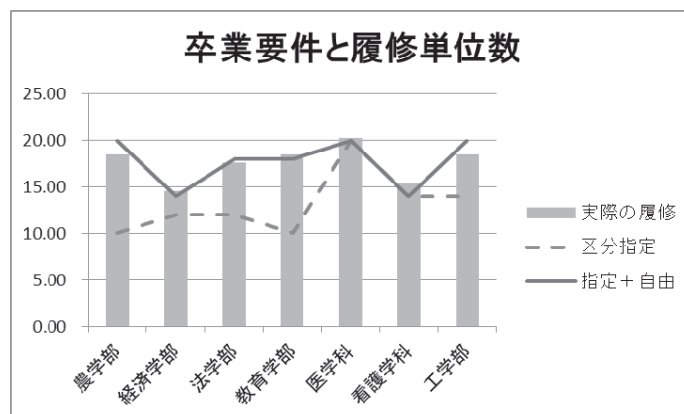


図2 各学部の区分指定(A)、区分指定+区分自由(A+F)の卒業要件単位数(折れ線グラフ)と、実際の一人当たりの学問基礎科目と主題Bを加えた履修単位数(棒グラフ、 $g+b$ )。

問基礎科目と主題Bの履修が少ないとは限らない。あくまでも、「区分指定+区分自由」単位数に着目する必要がある。

### 3-2. 学問基礎科目と主題Bの履修状況

学問基礎科目の実際の履修数( $g$ )は、学問基礎科目の区分指定単位数( $G$ )ともある程度関係がある( $G$ と $g$ の間の相関係数は0.89)。しかし、学問基礎科目の区分指定単位数と、区分自由単位数に $a$ を乗じたもの(区分自由科目のうち半数を学問基礎科目に振り向けるものと仮定して、 $a=0.5$ とする)を加えたもの( $G+aF$ )と、より高い相関係数(0.97)を持つ(図1b)。

主題Bの実際の履修単位数( $b$ )は、区分自由単位数( $F$ )と高い相関係数(0.91)を持っている(図1c)。回帰直線の回帰係数は0.38であり、区分自由単位数を1増やすごとに主題Bの履修単位数は0.38増加することがわかる。回帰直線の $y$ 切片は6.23である。これは、主題科目の履修基準が全学部共通に6単位であることを明らかに反映している。

区分自由単位数には大きな学部間差異がある。多い学部では10単位に上るのに対し、区分自由単位数が一つもない学部もある。このような差は、主題Bの履修単位数に明確に影響を与えていることがわかる。農学部の主題Bの積極的な受講状況は注目される。農学部の主題Bの履修単位数は9.19であり、教育学部を除く他学部よりも多い。これも、農学部の区分自由単位数が10あることを反映している。

## 4. 学問基礎科目の授業科目別学部別履修傾向

学問基礎科目は、人文社会科学系科目から自然科学系科目まで、24の授業科目に分けて科目を配置することにより、多様な学問分野の学習機会を保障する構造となっている。したがってこれらの授業科目は、21世紀型市民の獲得すべき基盤的知識体系として、学部の違いを越えて広くバランスよく履修されるべきものである。

まず、授業科目別の一人当たりの履修数を棒グラフで示す(図3)。履修科目には大きな分布の偏

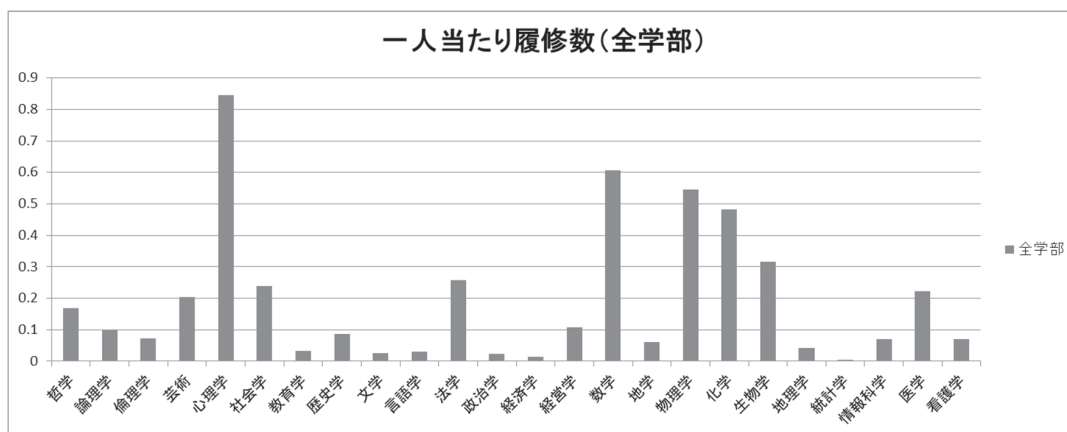


図3 全学部をあわせた各授業科目の履修登録数（履修単位数÷2）

りがあることがわかる。一人当たり履修数の多い授業科目は心理学である。なお、調査対象学生 2494 名中、心理学の科目を1つ以上履修している学生が 1499 名（60.1%）である。そのうち科目を複数履修している学生も 587 名にのぼる。学生一人当たり 0.8 科目を越えており、人気の極めて高い授業科目であることがわかる。次いで数学（1つ以上履修している学生が 35.6%）、物理学（同 32.6%）、化学（同 33.6%）、生物学（同 23.4%）の自然科学系科目が並ぶ。

授業科目別の一人あたりの履修数をさらに学部別に示した（図4）。この図から、特に自然科学系科目において、履修数が大きく理系学部偏っていることがわかる。グラフの左半分に位置する人文社会科学系科目については逆に、履修数が文系学部偏る傾向を示している。

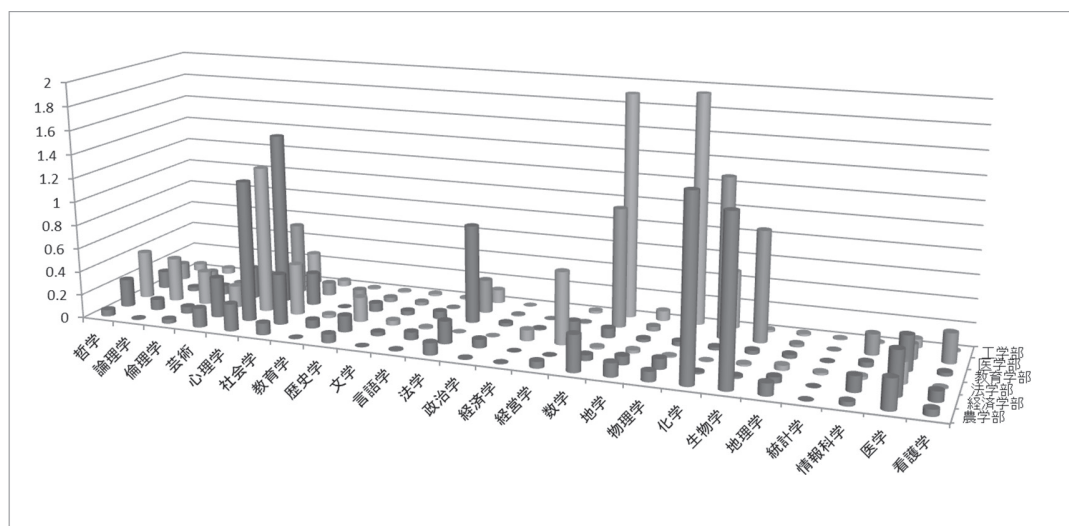


図4 授業科目別、学部別の一人あたりの履修科目数（履修単位数÷2）

図5は、文理別に履修数を示したものである。医学、情報科学などの一部の例外を除き、人文社会科学系科目は文系学部、自然科学系科目は理系学部に、大きく偏っていることがわかる。

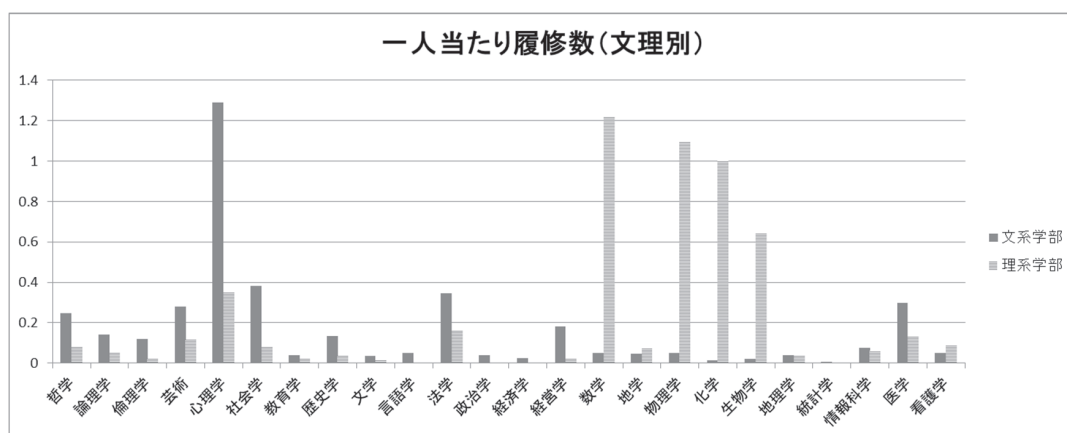


図5 文系学部・理系学部別の、各授業科目の一人あたりの履修科目数

図6に、文系学部（経済学部・法学部・教育学部）について学部別の履修数を図示した。法学、経営学については学部間の分布の偏りが目立つ。法学部において、比較的多くの科目に分散して履修する傾向がみられる。法学に教育学部の履修が集中しているが、これは教職免許に必要な日本国憲法の読み替え科目である法学Aの履修を反映している。

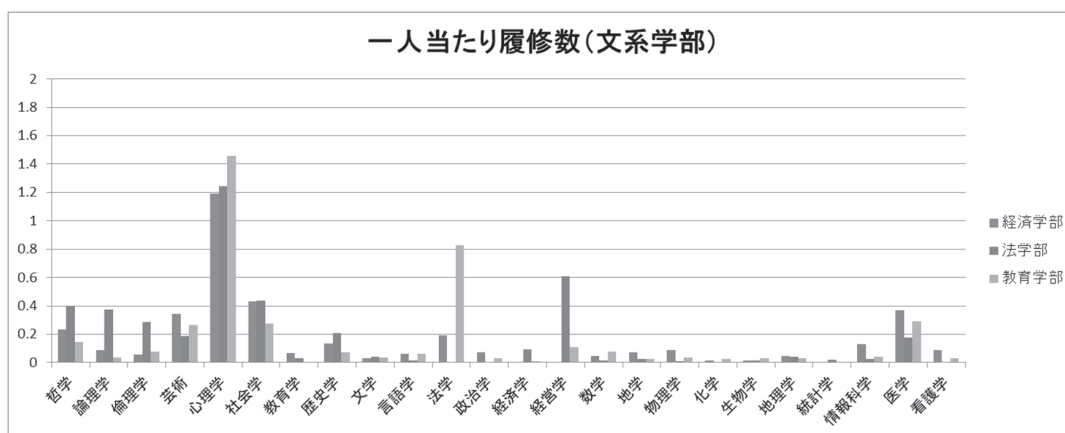


図6 各文系学部の、各授業科目の一人あたりの受講科目数

図7に、理系学部（農学部・医学部・工学部）の履修数を示した。自然科学系科目に偏りが見られるが、その中でも学部による偏りが大きく、農学部は化学・生物学に、工学部は数学・物理学に偏っている。図6と図7は同じ縦軸のスケールに統一したが、一人当たり履修数における理系学部の自然科学系科目への偏りは、文系学部の心理学への偏りをしのいでいることがわかる。



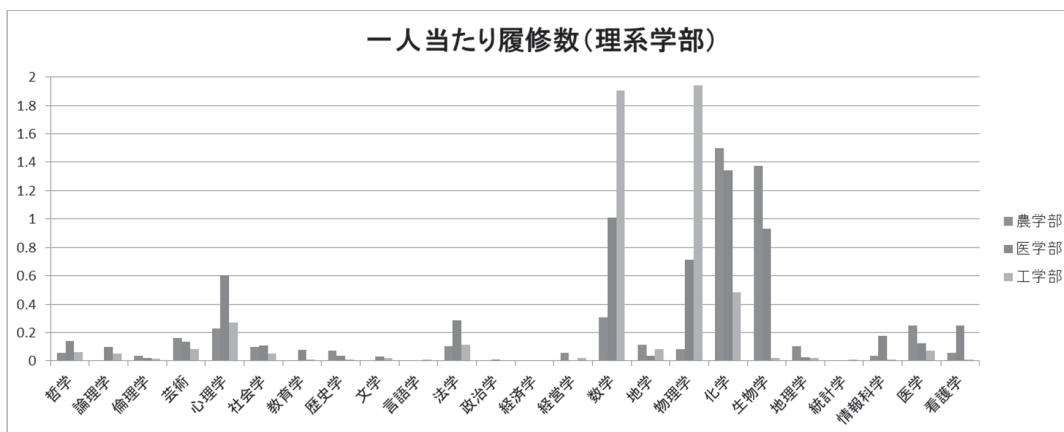


図7 各理系学部の、各授業科目の一人あたりの受講科目数

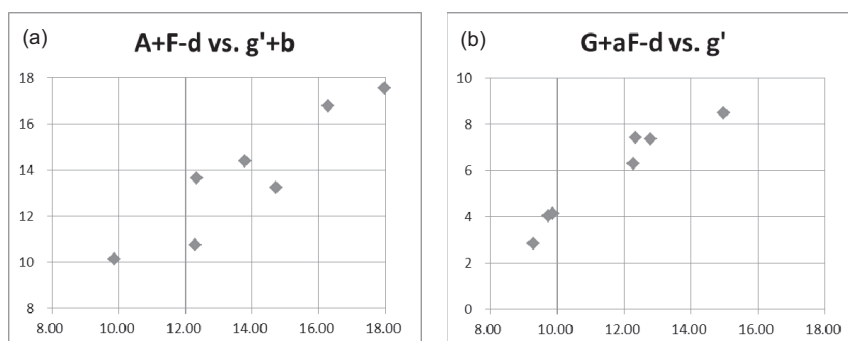


図8 履修基準単位数と実際の履修単位数の関係を表す散布図。(a) 区分指定科目と区分自由科目の履修基準単位数から専門基礎科目の平均的履修単位数を除いたものに対する、実際の学問基礎科目(専門基礎科目を除く)と主題Bの履修単位数の関係。(b) 学問基礎科目の履修基準単位数に、区分自由科目の履修基準単位数に0.5を乗じたものを加えたものから、専門基礎科目単位数を除いたものに対する、学問基礎科目の履修単位数の関係。

まず、学問基礎科目において、自然科学系科目には理系学部の、人文社会科学系科目には文系学部の学生の履修が多い。このことは、学部を越えて人文社会科学から自然科学までの広い学問体系を学ぶという学問基礎科目の趣旨から見て、問題があるということが示唆される。

ただし、自然科学系科目については、特に理系学部の専門基礎科目の履修が大きく結果に反映していることが推測される。教育学部においても、法学Aの履修が結果を大きく左右している。したがって、文系学部、理系学部間の偏りの多くは、こういった専門基礎科目の影響の反映である可能性が残っている。そのため次節では、これらの専門基礎科目をあらかじめ除いた履修傾向の分析を行う。

## 5. 専門基礎科目を除いた学問基礎科目・主題Bの履修傾向

ここでは、専門基礎科目を除いた学問基礎科目と主題Bの履修傾向を検討する。専門基礎科目の定義は必ずしも明確ではないが、ここでは、学問基礎科目のうち以下にリストした科目を専門基礎科目と考えることにした。

- ・法学A
- ・数学C、数学D、数学E
- ・物理学A、物理学B、物理学E
- ・化学B、化学C、化学D
- ・生物学B、生物学C

上記の12科目を解析から除いて解析を行った。

### 5-1. 履修基準と専門基礎科目を除く学問基礎科目・主題Bの履修傾向

表3にはさらに、専門基礎科目を除いたときの実際の一人あたりの履修単位数を学部別に記している。学問基礎科目の履修単位数( $g'$ )と主題Bの履修単位数( $b$ )、それらの和( $g' + b$ )を計算した。また、専門基礎科目を含む学問基礎科目の履修単位数( $g$ )から $g'$ を差し引くことにより、専門基

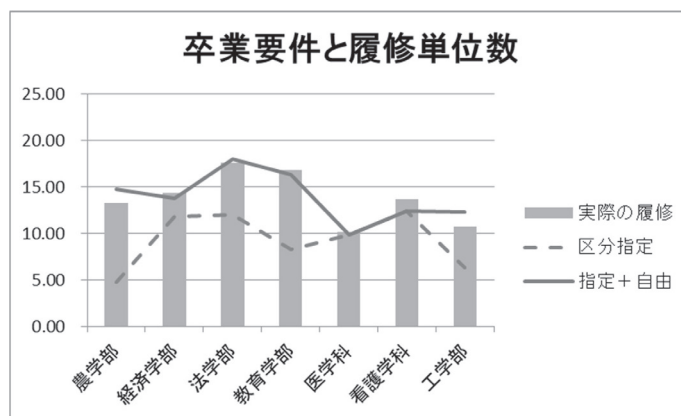


図9 図2に同じ。ただし、専門基礎科目を除いたもの。区分指定(A)、区分指定+区分自由(A+F)から専門基礎科目(d)を除いた卒業要件単位数(折れ線グラフ)と、実際の一人あたりの専門基礎科目を除いた学問基礎科目と主題Bの履修単位数(棒グラフ、 $g' + b - d$ )。

礎科目の履修単位数( $d$ )を計算した。

第3.1節で議論した専門基礎科目を含む学問基礎科目の履修単位数( $g$ )については理系学部の方が文系学部よりも大きな値となっていたが、専門基礎科目を除くと履修単位数は大きく減少する。その減少分、すなわち専門基礎科目としての学問基礎科目の履修単位数( $d$ )は、農学部で5.27、医学部医学科で10.12、工学部で7.70となる。

第3.1節と同様に、区分指定単位数と区分自由単位数の和( $A + F$ )が、学問基礎科目と主題Bの履修単位数( $g' + b$ )を強く規定している傾向は変わらない。 $A + F$ から各学部の専門基礎科目の平均的な履修単位数( $d$ )を差し引いた数( $A + F - d$ )と $g' + b$ の相関係数を求め、0.92という大きな正の相関を得た(図8a)。図9にその状況に関するグラフを示した。棒グラフで表される実際の学問基礎科目と主題Bの履修単位数(専門基礎科目を除く)は、「区分指定+区分自由」単位数から専門基礎科目単位数を引いた値を示す折れ線グラフと対応する。学問基礎科目の履修単位数( $g'$ )は $G + aF$ (ここでも $a = 0.5$ を採用)によって強く左右される。 $G + aF - d$ と $g'$ の相関係数は0.96となる(図8b)。

## 5-2. 学問基礎科目の履修傾向

次に、専門基礎科目を除いた学問基礎科目の履修状況を検討する。

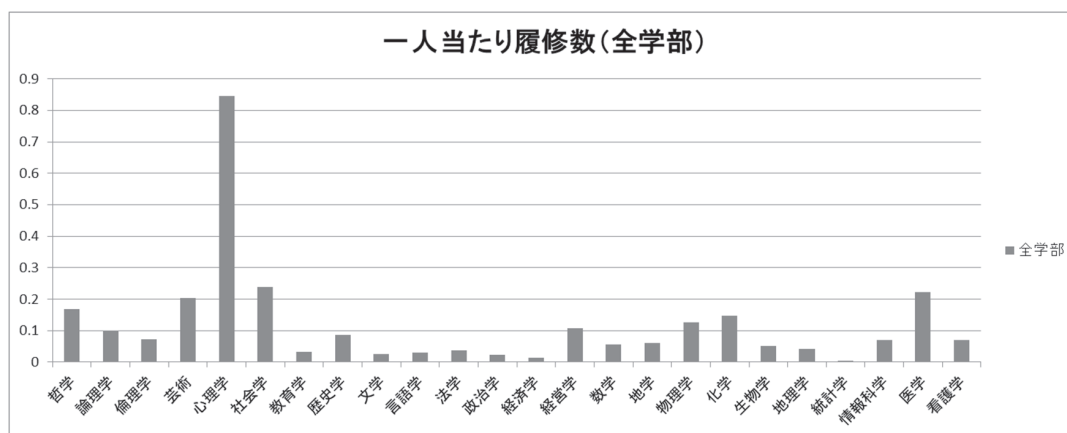


図10 図3に同じ。但し専門基礎科目を除いたもの

授業科目別の一人あたりの履修数を棒グラフで示す(図10)。履修科目には大きな分布の偏りがあることがわかるが、図2にはあった自然科学系科目の履修登録数の大きな分布が消えた。心理学が他を大きく引き離し、社会学、医学、芸術、哲学が続いている。

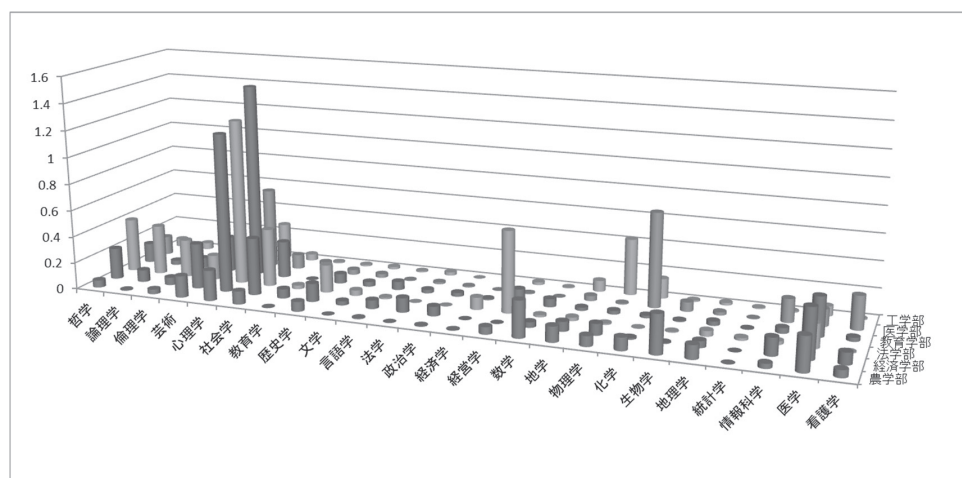


図11 図4に同じ。但し専門基礎科目を除いたもの

授業科目別の一人あたりの履修数をさらに学部別に示した(図11)。図3で顕著であった自然科学系科目における理学部への大きな値は見えなくなったが、引き続き文系学部と理系学部の差が目立つ。専門基礎科目を取り除いてみると、医学が文系学部、理系学部の枠を超えて比較的高い人気を集めて健闘しているようすが浮かび上がってくる。

図12は、文理別に履修数を示したものである。医学、情報科学の例外を除き、人文社会科学系科目は文系学部に、自然科学系科目は理系学部に、偏っていることがわかる。特に自然科学系科目については、専門基礎科目を除いてもなおこの傾向が顕著であることについて、特筆すべきである。

図13に、文系学部（経済学部・法学部・教育学部）について学部別の履修数を図示した。法学Aの除外により、法学の履修が少なくなったことを除き、図5との違いはない。文系学部においては専門基礎科目の設定が少ないことを反映している。

図14に、理系学部（農学部・医学部・工学部）の履修数を示した。図6にあった自然科学系科目

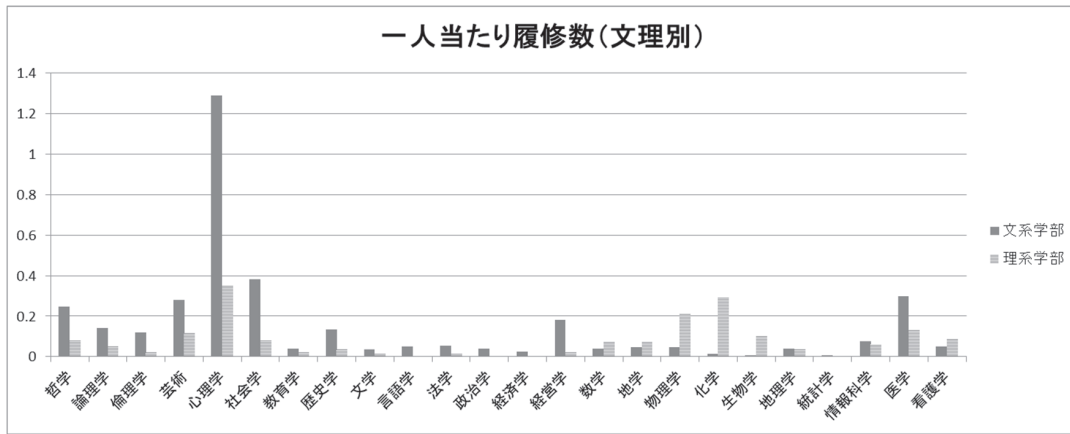


図12 図5に同じ。但し専門基礎科目を除いたもの

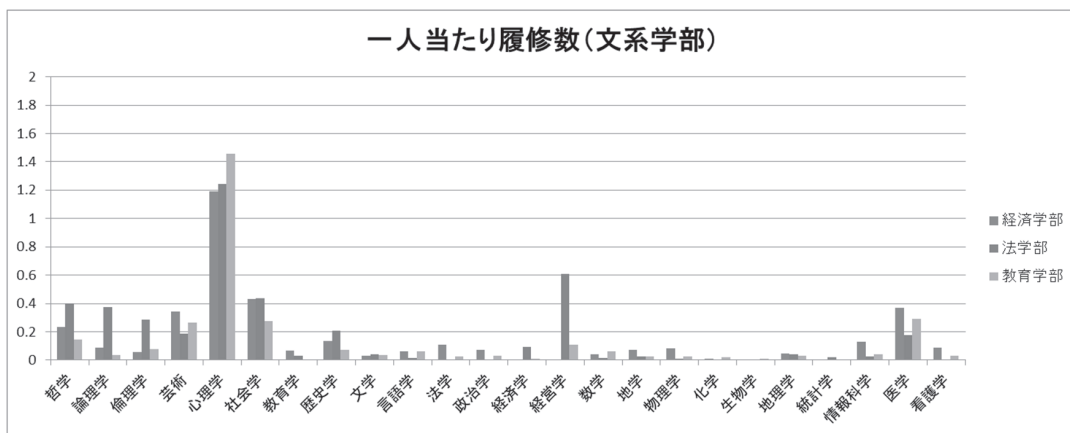


図13 図6に同じ。但し専門基礎科目を除いたもの

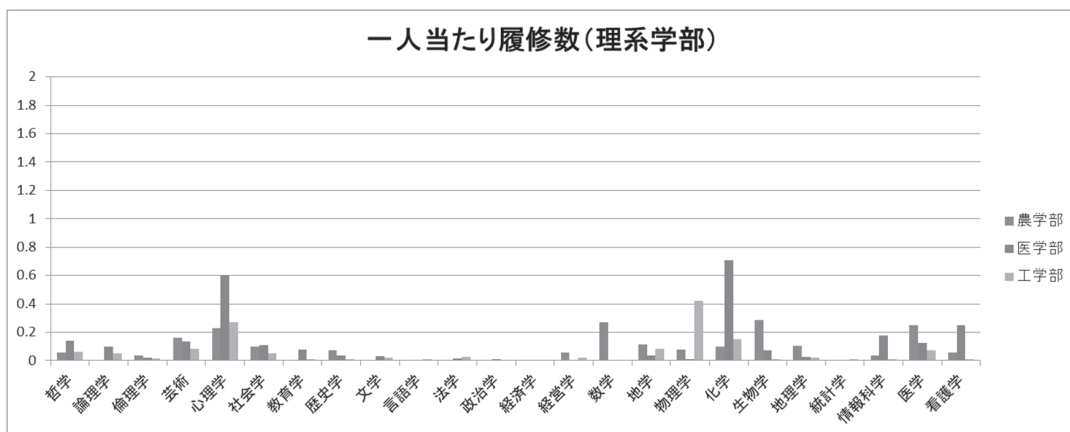


図14 図7に同じ。但し専門基礎科目を除いたもの

の大きな分布は見られなくなったが、引き続き自然科学系科目への履修の偏りが見られる。学部によるばらつきも大きい。教員免許取得を目的とする法学Aの受講が解析から除外されたため、法学の履修が大きく減少した。

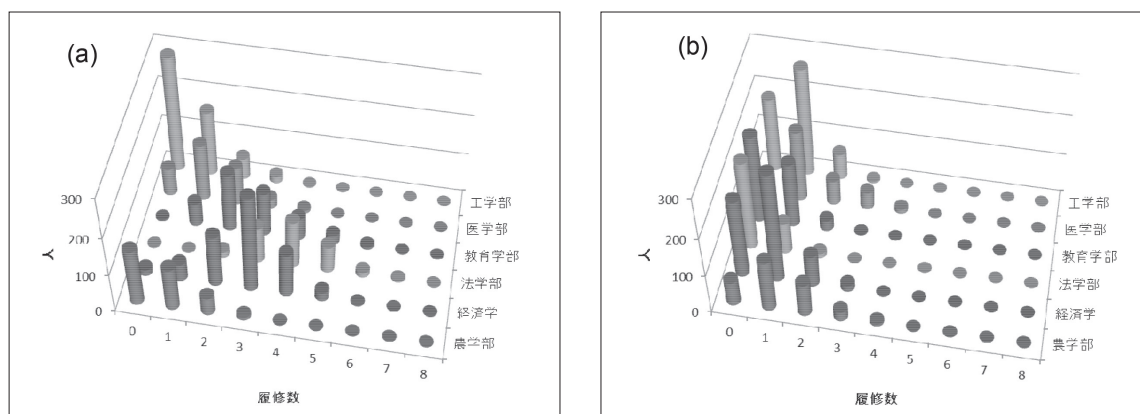


図 15 (a) 人文社会科学系科目と、(b) 自然科学系科目の履修科目数の頻度分布の棒グラフ。各学部について示した。

専門基礎科目を除くことにより、理系学部の自然科学系科目への偏りは軽減されるものの、引き続き自然科学科目系の履修は理系学部集中している。文系学部、理系学部の一人当たり履修単位数は、人文社会科学系科目についてはそれぞれ 6.03、1.69 であるのに対し、自然科学系科目についてはそれぞれ 1.25、2.20 と、いずれも大きな偏りがある。

専門基礎科目を除いた学問基礎科目を人文社会科学系科目と自然科学系科目に分け、学部ごとに履修科目数を調査した。対象となった全学生について、人文社会科学系科目、自然科学系科目をそれぞれいくつ履修しているかカウントした。その上で、各学部について履修科目数の頻度分布を棒グラフで示した。人文社会科学系科目の結果は図 15 a、自然科学系科目に関する結果は図 15 b である。

図 15 より、理系学部は人文社会科学系科目の、文系学部は自然科学系科目の履修科目数が少ない傾向が明瞭である。工学部生、農学部生の人文社会科学系科目の履修科目数の最頻値は 0 である (図 15 a)。逆に教育学部、法学部では、自然科学系科目の履修単位数の最頻値が 0 である (図 15 b)。理系学部のなかで比較すると、医学部生は人文社会科学系科目を相対的に多く履修している。文系学部のなかで比較すると、経済学部生は自然科学系科目を相対的に多く履修している。

全体的な問題点をまとめる。まず、専門基礎科目を除くと自然科学系の学問基礎科目の履修が少ないことが明らかとなる。科学的リテラシーの育成にとって、この現状は問題を含んでいる。また、理系学生は自然科学系科目に、文系学生は人文社会科学系科目に偏る傾向がある。専門と大きく異なる学問体系を経験する必要性を考えると、これも大きな問題点である。主題Bを履修していることにより、学際的な視点を学んでいるとも言えるかもしれないが、自然科学固有の、あるいは人文社会科学固有の学問的方法に触れることの意義は大きい。学生の知的関心を広げる努力も必要であるが、同時に、異なる学問体系を学ぶ学生を受け入れる科目の充実度を点検するなどの各学問領域の努力により、全学共通教育の充実が求められる。

## 6. 学部別主題Bの履修傾向

以下、主題Bの履修動向について触れる。

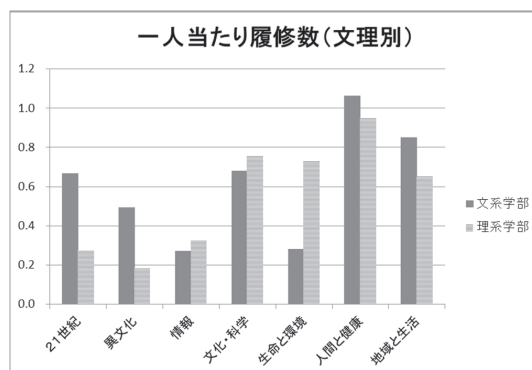


図16 主題Bのテーマごとの一人当たり履修科目数。文系学部、理系学部に所属する学生に分けて表している。

図16に文系学部・理系学部別の主題Bテーマごとの一人当たり平均履修科目数を示す。全学部を平均した履修単位数は、最も多いテーマが主題B-6「人間と健康」、最も少ないテーマが主題B-3「情報とコミュニケーション」となっている。

主題B-1「歴史のなかの21世紀」および主題B-2「グローバル社会と異文化理解」では文系学部に、主題B-5「生命と環境」では理系学部に、それぞれ履修が大きく偏っている。文系学生は文科系的なキーワードに、理系学生は理系的なキーワードに関連するテーマに偏る傾向がある。

更に、主題科目ごとに担当者の科目領域も調査している。このデータから、どの科目領域の担当者の授業を受講する傾向があるか、学部ごとに調査することも可能である。この点は続報に譲りたい。

## 7. 結論

2011年度よりほぼ現行のカリキュラムとなった全学共通科目について、2011年度・2012年度入学生の1・2年次の履修傾向を調査した。特に今回は、全学共通教育の到達基準③の前半部「人類の文化、社会および自然についての幅広い知識・・・を身につける」の達成の度合いを評価した。この到達基準に沿った科目群として、学問基礎科目と主題Bがある。これら二つの区分に属する科目の履修状況に焦点を当てた。ただし、学問基礎科目の中には、専門教育に必要な能力を獲得することを目的に位置づけられ、科目がある程度指定される形で履修している科目群（本稿では専門基礎科目と表現した）がかなりの比重で存在する。特に理系学部では、専門基礎科目の履修単位数は大きな比重を示す（農学部5.27単位、医学部医学科10.12単位、工学部7.70単位）。専門基礎科目は、上記到達基準③の前半部には直接関係しない。そこで、本稿では専門基礎科目を除いた調査も合わせて行った。以下、専門基礎科目を除いた学問基礎科目と主題Bの履修状況を調査した結果からわかることをまとめる。

まず、学部別・学科別の履修基準は、実際の履修状況を強く反映しており、学生の履修動向を規定

する要因となっていることがわかる。専門基礎科目を除いた学問基礎科目と主題Bの履修単位数は、区分指定単位数（履修基準表に明確に区分が指定されている最少必要単位数）と、区分自由単位数（履修基準表に明記はされていないが、学問基礎科目と主題Bを含むいくつかの区分にまたがって選択取得することが必要な単位数）の和に強く依存している。履修基準表には区分指定単位数が明記されているため、学部ごとの履修状況を区分指定単位数によって判断してしまいがちであるが、実際の履修動向を決定するのは区分指定単位数+区分自由単位数なので注意が必要である。主題Bは、学部別・学科別の区分自由単位数と強い相関がある。主題Bの履修を増やすためには、区分自由単位数を増加させることが効果的であると考えられる。

また、文系学部の学生は学問基礎科目の人文社会科学系科目と主題Bの文系的なキーワードの入ったテーマ（主題B-1「歴史のなかの21世紀」や主題B-2「グローバル社会と異文化理解」）に、理系学部の学生は学問基礎科目の自然科学系科目と主題Bの理系的なキーワードの入ったテーマ（主題B-5「生命と環境」）に、それぞれ偏った履修傾向があることが明らかとなった。更に、多くの理系学部・学科において、学問基礎科目の人文社会科学系授業科目の履修単位数の最頻値が0であること、逆に多くの文系学部において、学問基礎科目の自然科学系授業科目の履修単位数の最頻値が0であることが判明した。全学共通教育の到達基準③の前半部に則っていないことを示唆する結果である。

上記の結果を踏まえて各学部においては、全学共通教育と各学部の教育目標にも照らしながら、自ら定めている全学共通教育に関する履修基準の検討を行うことが望まれる。また、全学の教員は、それぞれの科目領域あるいは全カリキュラムが、学生に対して必要な科目を提供しているかどうか全学的視野から再検討する必要がある。

香川大学全学共通教育スタンダードを達成するために、全学共通科目の各区分の理念的な整理も必要である。特に、専門外の学問体系を学ぶことを目的とした学問基礎科目と、専門基礎を学ぶことを目的とした学問基礎科目、学際的な視点から現代社会の諸問題に目を向ける主題Bのそれぞれの役割を整理し、あるべき履修形態を共通認識とし、開講科目の現状を把握するとともにその必要な再検討を行うことを、当面の課題として提起したい。

ただし、2013年度から医学部医学科、工学部、農学部では、一部履修基準が変更されている。本稿では分析対象が2011年度と2012年度であるため、この変更には触れていないことについて注記しておきたい。

なお、今回得られた履修状況のデータは、各学部や各科目領域における課題検討にも役立つものと考えられ、適切な活用を促していきたい。また、実際の履修状況に見られる科目間の連関の調査は、科目相関図を作成する取り組みにも生かしていくことが望まれる。主題Bの履修状況をより深く解析することも当面する課題である。今回は医学部を除いて詳細に分析できていない学科別、課程別の動向分析も課題として残っている。これらの課題に答えた結果を今後続報としてまとめていきたい。

## 参考文献

- 香川大学大学教育開発センター（2013）『全学共通科目教員ハンドブック（2013年度版）』。  
香川大学（2012）『全学共通科目修学案内（教養教育）平成24年度（2012）』。